関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

アンリ・ルフェーヴルのマルクス主義論

著者	杉原 四郎
雑誌名	關西大學經済論集
巻	3
号	2
ページ	82-94
発行年	1953-09-30
その他のタイトル	Henri Lefebre on Marxism
URL	http://hdl.handle.net/10112/15841

アンリ・ルフェーヴルのマルクス主義論

杉原四郎

一

マルクス主義的立場に立つ現代フランスの代表的哲学者の一人であるアンリ・ルフェーヴル（Henri Lefebvre; 1901—）の名は、ここ数年来彼の業績がつぎつぎに紹介される[1]事によって、わが国でも広く知られるようになった。そのフランス思想史上の諸研究は、従来の研究水準をぬくものとして高く評価されているのであるが、同時にそのような研究の方法論的基礎をなしている彼のマルクス主義理解が、公式主義的偏狭を脱却したすぐれて柔軟なものであることが注目をひいており、最近彼のマルクス研究を総括する二つの著書が飜訳される[2]におよんで、その思想が多くの人々の関心をあつめているようである[3]。やがてそのうちに本格的なルフェーヴル論があらわれるであろうが、このユニークな且つ多面的な思想家を全面的に検討することは、わが国のマルクス研究にも寄与するところがすくなくないであろう。本稿はこのような研究への一つの手がかりとして、ルフェーヴルが「クセジュ叢書」の一冊として発表した『マルクス主義』をとりあげ、これをレーニンが一九一四年グラナト百科全書のために執筆した『カール・マルクス』[4]と比較しながら若干の吟味を加えることによって、彼のマルクス主義論に一つの照明をあてて見よう。けだし、この両者の間には、執筆の時期に三十年以上のへだたりがあり、直接の読者として一方はフランス他方はロシアの国民を対象としたという差異はあるが、いずれも、マルクス主義者によって書かれたマルクスの思想全体に関する簡潔な解説書であると同時に、それぞれのマルクス研究の成果を凝集した高度の理論的水準を示しており、殊にレーニンの『カール・マルクス』は、ルフェーヴルみずからマルクス主義思想への入門書として第一にあげている[5]ように、現在最も権威のあるマルクス主義解説書とされているものであるから、これを、ルフェーヴルのマルクス把握を解明する

一つの基準としてとりあげることは、決して不当な方法ではないと思われるからである。

註(1)『弁証法的唯物論』(一九三九)は竹内良知氏が(『思想』一九五一年十月号)、『デカルト』(一九四七)は森有正氏(民科『理論』一九五〇年二月号)および平田清明氏(『一橋論叢』一九五一年五号)が、『ディドロ』(一九四八)は野田又夫氏が(桑原編『十八世紀フランス』一九五二年)、『パスカル』(一九四九)は竹内良知氏が(『経済科学』一九五一年第四号)、それぞれ紹介し、またルフェーヴルが一九四九年「新しきヒューマニズム」のテーマでひらかれたジュネーヴの国際討論会で行った「革命的人間」についての講演は笹本駿二氏が(『世界』一九五一年二月号)紹介している。

(2) 竹内良知訳『マルクス主義』一九五二年、白水社。本田喜代治訳『弁証法的唯物論』一九五三年、新評論社。

(3) 小田切秀雄『共産主義的人間』(三頁)や梅本克己氏の書評(『日本読書新聞』一九五三年六月八日号)参照。

(4) 大塚弘訳『カール・マルクス』(岩波文庫)。以下『カール・マルクス』からの引用は本訳書の頁数のみを横書きで示す。

(5) 竹内訳『マルクス主義』一四二頁。以下ルフェーヴル『マルクス主義』からの引用は本訳書の頁数のみを示す。

二

ルフェーヴルの『マルクス主義』は、みじかい「はしがき」を別にすれば、序章と結論とにはさまれた五つの章——すなわち、第一章マルクス主義哲学(a)弁証法的方法・(b)人間の疎外)第二章マルクス主義道徳論、第三章マルクス主義社会学あるいは史的唯物論、第四章マルクス主義経済学、第五章マルクス主義政治学——からなっている。これに対してレーニンの『カール・マルクス』は、はじめに簡単なマルクスの伝記をしるした後、「マルクスの学説」(哲学的唯物論・弁証法・唯物史観・階級斗争)、「マルクスの経済学説」(価値・剰余価値)、「社会主義」、「プロレタリア階級斗争の戦術」という順序でマルクスの思想を解説している。[1] 両書のこの本論の部分をくらべて見ると、(一)前者の第一—三章が後者の「マルクスの学説」に、(二)第四章が「マルクスの経済学説」に、(三)第五章が「社会主義」および「プロレタリア階級斗争の戦術」にそれぞれ相当し(この三つがまたいわゆるマルクス主義の三つの源泉にほぼ照応することはいうまでもないであろう)大体において平行した構成をとっているけれども、前者においては、第一—三章の部分が第四章と第五章とを合せた分量の二倍を占めているのに対

し、後者においては三つの部分がほぼ量的にひとしいという相違があるとともに、内容的にも第一―三章が「マルクスの学説」とかなりのちがいがあることは、その章別見出しをくらべてみただけでも気づかしめられるであろう。さらに、両者の序説的部分におけるマルクス主義に対する一般的特色付けにおいて、前者が、「科学と哲学とをみずからのうちに統一し」（三〇頁）、「社会的・政治的な実践活動が、（その）必須な構成部分をなしている」（一五頁）ところの世界観として、「その幅と深さとの全体にわたる意味に解された場合には、マルクス主義は弁証法的唯物論と名づけられる」（三〇頁）とし、「その名称の方がこの該博な綜合の本質的諸要素をよりよく示しているし、とりわけ――その綜合を本来の意味でのマルクスの業績から切り離すことなく――この学説のうちに一人の個人の表現でなく、一つの時代の表現を見てとるのに妨げが少ない」（同上）とのべているのに対し、後者が、「（マルクス）の見解は全体として近代的唯物論と近代的科学的社会主義とを、世界の一切の文明国における労仂者運動の理論および綱領として示すものであり」（一八頁）、その世界観的基礎と実践的綱領とを媒介するマルクスの経済学説が「マルクス主義の主要内容である」（同上）と規定している点を考え合せると、叙述の上での重点のおきどころがかなりちがってくるであろうことが予測されるであろう。以下、ルフエーヴルのマルクス主義論の核心的部分をなす第一―三章を中心として、その内容の吟味に入ることにしよう。

註(1)両書はともに巻末に参考文献をかかげているが、その中にあるマルクスの主著目録をくらべて見ると、ヨリ簡単な前者にあつて後者にないものに、『経済学・哲学草稿』と『ドイツ・イデオロギー』がある。この事はそれらの草稿がレーニンの時代にはいまだ発見されていなかつたから、当然の事であるが、ルフエーヴルがとくにこの二つの草稿を重視していることに注意すべきである。彼は『弁証法的唯物論』の中で、この二つの草稿の出版の意義に関して、従来のテキストは、『神聖家族』や『ユダヤ人問題』や『ヘーゲル法哲学の批判』によつてすでにしられていたマルクスのヒユーマニズムを明確にしていなかつたが、これらの草稿は、「どのようにして、かれの思想――経済理論――の発展が、具体的な人間主義を破壊しないで、これを明かにし豊かにしたかを示している」（本田訳一一五頁）とのべているが、このような評価は、彼のマルクス理解の特色を端的に示すものとして興味がある。

三

ルフェーヴルによれば、マルクス主義哲学は二つの主要な局面をもつ。「第一は、ここではそれが本質的なものとみなされるが、方法論的局面であ」って、マルクスは、理性の方法的使用に関する問題を発展させたヘーゲルの論理学を、科学的な労作の研究過程を通じてさらに深化することによって、「弁証法的方法の仕上げをつづけた」（三二頁）。第二は、疎外の理論であって、マルクスは、意識の通史を素描したヘーゲルの『精神現象学』をとりあげ、そこから「疎外という有名だが曖昧な概念をとり出して、それを具体的な理論に変えた」（同上）。そこで第一章「マルクス主義哲学」は「弁証法的方法」と「疎外の理論」の二節にわけて論ぜられることになる。[1] これをレーニンとくらべて見ると、第一に、レーニンでは「哲学的唯物論」がはじめにとりあげられ、ついで「弁証法」がのべられているのに、ルフェーヴルでは弁証法から、しかも特に弁証法的方法から出発し、[2] 唯物論はとくに項目をもうけて論じられていないこと、第二に、レーニンには全く見られない疎外の理論がルフェーヴルによって大きくとりあげられていることに気ずく。第二の点については次節で見ることにし、ここでは第一の点について考えよう。

ルフェーヴルはマルクスの使用する弁証法的方法を、「彼は一定の客観的実在を研究するにあたって、その実在の矛盾する諸局面と諸要素とを分析(し)……矛盾諸局面または諸要素を、その聯関を無視することなく、一つの実在こそ問題であることを忘れることなく、区別した後、彼はその実在をそれの統一性すなわちそれの運動の総体において再発見するのである」（三六―三七頁）と要約し、さらに「マルクス主義は、それに先行する諸方法よりもいっそう明白に、研究される諸対象の各々の種別の、そして各個の対象さえもの、（質的な）独自性に固執する。……各々の実在においては、その固有な諸矛盾、その固有な（内的）諸運動、その質とその急激な諸転化を捉えることが必要である。だから方法（論理的）の形式は内容、対象、研究される材料に従属させられねばならない」（三九―四一頁）点を強調して、「それゆえ、ひとが諸事物についてつくる諸観念――諸観念の世界――は人々の頭悩のなかに表現され、反映された物質的な現実的世界にすぎない。すなわち、諸観念は実践および外界との能動的接触から、文化の全体を含む一つの複雑な過

程をとおして、構築されるのである」（四一―四二頁）とのべている。このように、ルフェーヴルは、マルクスの方法が動的・全体的観点をつらぬくものであると同時に、存在が意識に先行するという唯物論的原理にもとずくものであることをも、明確に指摘しているのである。

しかし、ルフェーヴルの説明では、全体として見ると、序章で哲学的唯物論と弁証法との統一としてとらえられた弁証法的唯物論（三〇頁）の、弁証法的側面に対して唯物論側面の方が軽くとりあつかわれており、これに応じて弁証法のとりあげ方においても、方法論としての説明の方が、自然そのものの運動法則としての・したがつて認識論としての弁証法に関する論述―レーニンが強調したところの(3)――にくらべて、ヨリ重視されているように思われる。(4)この点の差異は、一つには、レーニンが弁証法的唯物論からの「今日とくに流布しているヒュームおよびカントの立場、種々の形態における不可知論・批判主義・実証主義」（P. 21）に対する批判を重視していたのに対し、ルフェーヴルは、結論の（a）哲学の領域でのべている（一一七―一二三頁）ように、弁証法的・史的唯物論の立場からの機械的俗流的唯物論への批判に力点をおいているからであろう。彼はそこで、弁証法的唯物論は、弁証法と唯物論とを「諸事実のうちに、人間の発展のうちに……再発見することによつて、不可分離的に統一する。……（それは）なにより先にすべき大前提（préoccupation）の中心に人間をおくのである」（一二一―一二三頁）とのべ、弁証法的唯物論のみが人間を具体的全体的に把握しうることを強調するのであるが、マルクス主義のヒューマニスティックな性質を強調すればするだけ一そうマルクスの物質概念を明確にし、弁証法が自然史の論理であることを確認すること、総じてマルクス主義の唯物論的基本性格を強調することが必要ではなかろうか。(5)けだし、マルクス主義にヒューマニズムを見ようとする場合、ともすればその唯物論的性格を軽視することによつて、観念論的修正主義に陥りがちとなることは多くの事例が示すところであるから。

註(1)　ルフェーヴルはマルクスによつて疎外の理論の仕上げの方が弁証法的方法のそれよりも早く行われた事を指摘し(三二頁)、『弁証法的唯物論』でこの点を詳論している。それによれば、『共産党宣言』までの時期には、「まだ、弁証法的唯物論は存在していない。その本質的な要素の一つ、弁証法は、ことさらに棄てられている。史的唯物論だけが定式化されており、それの経済的な要素が

人間問題の解決として招かれ、これが哲学を変形し止揚している。内容……を把握しようとのかれらの努力の中で、マルクスとエンゲルスとは、形式的な方法を除外した。この内容の運動はある種の弁証法を含んでいる。すなわち、階級の対立、所有と窮乏との対立――この対立の止揚。だが、この弁証法は、概念的に表現しうる一つの生成の構造にむすびつけられていない。それは、実際上あたえられたもの、経験的に確認されたものと考えられている。……弁証法的な方法は『経済学批判』と『資本論』との準備の仕事のときに、マルクスによつて再発見され、復権させられた……。経済学の諸範疇とその内的な連繋の仕上げが、経験主義を止揚し、科学的な厳密さの水準に達し――そして、そのときに、弁証法的な形式をとつたのである」（本田訳・八八―九〇頁）。これは注目すべき見解である。たしかにマルクスの弁証法的把握が、『経済学批判』を経て『資本論』にいたつて最高の段階に到達する（価値論の完成！）ことは事実である。そしてこの点の確認が、ルフェーヴルを、初期のマルクスの見解を後期のそれから切りはなして前者を過大評価する一部の論者から峻別する。しかしはたして初期のマルクスたとえば『経済学・哲学手稿』は、疎外の理論をふかく変容させた上で、受けいれるために、弁証法論理をしりぞけている」（同上六五―六六頁）といいうるであろうか。いかにもマルクスはその手稿の中でヘーゲルの弁証法を痛烈に批判しているが、それは弁証法を「しりぞける」ためではなくこれをのりこえるためであり、彼がヘーゲルから批判的に摂取した弁証法的労働概念こそ、当時の彼の思想体系の中核であり、後年の『資本論』を生み出してゆく胚種でもあつた（ルカーチの大著『若きヘーゲル――弁証法と経済学との関係』はこの点について示唆にとむ）。このような観点から見れば当時のマルクスの思想を経験論的とするのはいい過ぎであり、『資本論』準備期における弁証法研究は、その「復権」というよりはむしろ「深化」ではないであろうか。

（2）弁証法的方法から出発した本書は第五章の終りでふたたび弁証法的方法に復帰する（一一四頁参照）。

（3）『カール・マルクス』（PP. 19–27）およびレーニンがこれとほぼ同じ時に書いたと思われる草稿『弁証法について』を参照。

（4）たとえばルフェーヴルは序章で「マルクス主義的方法のあらゆる本質的特徴」を、「諸事実と諸観念とをその外観上の孤立から救い出し、諸々の関係をあきらかにし、ばらばらに現われている諸局面をとおして描き出される総体の運動を追求し、諸々の矛盾を解決する」点にあると書いている（二八頁）が、第一章でカントやコントを評価する場合でも、このような観点に立つている。

これをレーニンのカント批判の観点(PP.21―22)と比較せよ。

(5) ルフエーヴルは序章でマルクス主義的世界観をキリスト教的世界観および個人主義的世界観（とくにその「頽廃した代用品」たる実存主義）と対照させているが、この対照をより明確に浮彫する点からいつてもマルクス主義の唯物論的性格はもつと重視さるべきであろう。

四

ルフエーヴルによれば、マルクスはヘーゲルの疎外概念に「それの弁証法的、合理的かつ積極的な意味を与えた。そして、それこそマルクス主義の本質的な……哲学的局面である」（四七頁）が、「疎外とそのさまざまな諸形態についてのマルクスのテキストは彼の全著作に散在していて、その統一性はきわめて最近まで気ずかれないままであつた」（五八頁）。第一章(b)人間の疎外はこの点をとりあげるのであるが、疎外の理論をこのように重視することは、ルフエーヴルのマルクス主義論の著しい特色をなしている。本書の構成上から見ても、さきに見た第一章(a)弁証法的方法は、この人間の疎外を正しくとりあつかうための論理的方法的前提を明らかにするためのものであるし、第二章以下は、第一章(b)で一般的に論ぜられた人間の疎

外の各論的展開に他ならないのであつて、その意味においてこの部分は本書の中心的位置をしめているのである。以下その説くところを要約すればつぎのごとくである。

（一）人間は非人間的なものを通してのみ人間的なものを形成せしめる矛盾的存在であり、自己疎外とその止揚という動的過程を通じて成長発展してゆくのであるが、人間の疎外は、単に理論上のことだけではなく「それはまたとりわけ実践的である。すなわち経済的、社会的、政治的である」（五一頁）。したがつて、その止揚も亦「イデオロギー的抽象物や貨幣から政治的国家にいたるまでのこれら諸物神（すなわち人間の活動性の生産物でありながら人間から独立し対立しこれを隷属させているもの――引用者補）……の破壊によつて、物神性を前進的に除去することによつて可能となる」（五三―五四頁）。

（二）したがつて人間の歴史は基本的には「一つの自然的過程――人間が自然から切り離されるのでなく自然の一存在として……自然に対して斗争し、この相剋をとおして発達する過程である。……人間による人間固有の意識の能動的生産はその発達の自然的過程に干渉するが、しかしながら――決定的な飛躍によつて人間存在がその活動性を意識的にしかも合理的に組織することができるようになる瞬間までは――その発達から自然的

過程という性格を剝ぎとるものではない。……（この上に向――引用者補）諸物神という非人間的な（虚妄な仕方で人間的な）世界が生ずる。したがつて、人間の歴史は三つの局面または要素、自生的な（生物学的・生理学的・自然的）要素――反省的な要素（さしあたつては不完全にしか解放されていないが、それでもすでに現実的で有効な、発生しつつある意識）――仮象的かつ幻想的な要素（疎外と物神という非人間的なもの）――の絶えざる相互滲透と相互作用とをしめしている」（五四頁）

（三）「科学的な共産主義は歴史の運動全体によつてて、全体性において考察された人間の生成によつて規定される」（五六頁）。すなわち、共産主義は、「一、人間が自然との……斗争のもたらしたあらゆる成果とながい歴史がたくわえたあらゆる富とをもつて開花する歴史的時期として、二、理性が決定的に現われ出て、人間的総体を組織し、自然的な、矛盾した。数奇な、苦痛にみちた過程……を止揚する……時期として、三、人間的なものの多面的な……疎外がだんだん止揚され、ふたたび吸収され、廃棄される（……そのためにこれらの矛盾をつうじて獲得された物質的・精神的富が排除されるのではない）時期として、定義される」（五七―五八頁）。

（四）ところで人間の自己疎外を止揚することによつて共産主義を実現する主体については、第二章マルクス主義道徳論――これは、「マルクス主義に一種の非道徳主義的シニズムを帰する……誹謗」に対して、「マルクス主義は、こんにちこそ――諸価値を現実の外に設定することを拒否し、したがつて道徳的評価の根拠を現実のうちに求めることによつて――道徳的疎外とイデオロギー的幻想から解放された新しい倫理学を創造しなければならぬ」（六三頁）ことをあきらかにするのであつて、第一章（b）とともに本書の最も特色且つ生彩ある部分である――の中でつぎのようにのべている。

「プロレタリアートのみが、全面的に疎外を生き、疎外を蒙つているのであるから、自己自身を解放することによつて社会と人間とを解放することができる。……抑圧されしかもそれに同意しているときは、プロレタリア的個人は従順を徳とみなす。だが彼が経済的政治的斗争において行動するときには、規律と創意、責任感が彼にとつて必然的に価値となる。彼はそれらの価値を獲得しなければならない。それは彼にとつては生きるか死ぬかの問題である。……マルクス主義がプロレタリアートと利害をともにするは、プロレタリアートが弱いものである

かぎりにおいてではなく、一つの力であるかぎりにおいてであり、それが無知であるかぎりにおいてでなく、認識をわがものとし、豊かにするにちがいないかぎりにおいてであり、――ブルジョアジーによつて非人間的なものとして斥けられているかぎりにおいてではなく、みずからのうちに人間の未来を担い、虚栄に充ちたブルジョアジーを非人間的なものとして斥けるかぎりにおいてである。一言でいえば、マルクス主義はプロレタリアートのなかにその生成と可能とを見るのである」（六三―六六頁）。

（五）さらにルフェーヴルは、「このように理解された止揚は一つの社会的命法の意味をもち、また個人的規模での命法――すなわち倫理――の意味をもつている。個人は、各々の個人は自己を止揚すべきである！……自己を止揚すること、それは生成の方向に、全体的人間にむかつてすすむことである」（六七頁）として、「全体的人間、現実的生成のもつとも深奥にひそんでいるこの観念」（六六頁）[1]について、つぎのようにのべている。「真の個性は全体的人間、すなわち開花した自然的生命力と、不具にされた不完全な諸活動性（細分され分割された労仂）を止揚して実践的行動と理論的思惟をおこなうことのできる完全な明敏さとを目ざすであろう。それは自由な社会における自由な個人であろう、とマルクスはいつている。この視角からすれば、すでに人間的疎外一般の止揚として定義された共産主義はまた個人の疎外および内的諸相剋の止揚とも定義される。この方向には、理論と実践との相剋、自主的生命と反省的生活との相剋を止揚して、それらを自分のうちでより高い綜合に再統一している最初の新しい人間たちの姿がすでにあらわれている」（六九頁）。[2]

註(1)「全体的人間」(l'homme total) については『弁証法的唯物論』（本田訳・一八三―二〇八頁）にくわしい説明がある。

(2) 今やあらわれつゝある「新しい人間たち」については、「革命的人間」（笹本訳・『世界』第六十二号一五五頁）を参照。

五

ルフェーヴルがここで強調しようとしていることは、要するに、「マルクス主義は人間の観念とヒューマニズムとに完全に具体的な意味を与えることによつて、それを更新するものである」（六九頁）ということ、すなわち、マルクス主義的人間観

が他の諸種の抽象的一面的人間観――形而上学的（四六―四七頁）・個人主義的（六八―六九頁）・俗流唯物論的（一一七―一一八頁）など――にくらべていかに具体的全体的なものであるかということである。ルフエーヴルは、その著『弁証法的唯物論』や『マルクスの思想を認識するために』などに見られるような、マルクスの初期の思想に関する独自の研究によつて、「人間の自己疎外とその止揚」という論理や「全体的人間」という理想がマルクス主義思想にとつて決定的な重要性をもつているという結論に到達し、このような視角から、マルクス主義のヒューマニズム的性格を、どこまでもマルクス主義の立場に忠実に内在しながらあきらかにしようとするのであつて、彼のマルクス研究の最も重要な意義はこの点にあると思われる。またルフエーヴルがマルクス主義の中に「具体的個人の理論」がふくまれていることに特に注目し、[1] 本書においても第二章の中で人間的個性の発展について論じていることは、従来のマルクス研究では十分に論じつくされなかつた局面をほり下げようとしたものとして、理論的に重要な価値があるのみではなく、マルクス主義を西欧的個人主義や近代的ヒューマニズムと機械的に対立せしめる見解が有力に流布されている現在、とくにプルードン以来無政府主義的個人主義が根づよい地盤をもつているフランスにおいて、マルクス主義のこの側面を強調することの実践的意義も亦すくなからぬものがあるであろう。ところでルフエーヴルは人間の疎外過程の諸相について、第三章マルクス主義社会学あるいは史的唯物論では分業と私有財産の問題を中心とした社会的疎外過程を、第四章マルクス主義経済学では価値および剰余価値の問題を中心とした経済的疎外過程を、さらに第五章マルクス主義政治学では階級対立および国家の問題を中心とした政治的疎外過程を展開しながら、さきに一般的にのべられた歴史の三つの局面――自生的・反省的・仮象的（五四頁）――の相互作用を、それぞれの段階においてその現実的なすがたを説明する（八二―八三頁、一〇〇頁、一〇四―一〇五頁）とともに、それに応じて、さきに抽象的にのべられた共産主義の概念（五七―五八頁）に具体的な内容規定をあたえている（八五頁、一〇〇頁、一一〇頁）のであるが、われわれはここにおいてふたたびレーニンとの対比をとりあげることができる。すなわち本書の第三章は『カール・マルクス』の「唯物史観」および「階級斗争」、第四章は「マルクスの経済学説」、第五章は「社会主義」および「プロレタリア階級斗争の戦術」

にそれぞれ照応するのであるが、両者の叙述を比較するとき、われわれは、階級的・党派的・革命的観点が、レーニンにおいていかに力説されているか、ルフェーヴルにおいてそれほど強調されていないかに気付くのである。たとえば第三章でルフェーヴルは、「生産諸様式の分析においては、幾重にもかさなりあつた多様な相剋と矛盾とがあらわれるが、まずそしてとりわけ、社会諸階級の相剋があらわれる。ここで、われわれの注意をひくしかも本質的現象としてあらわれるものは人間にたいする人間の斗争であり、人間による人間の収奪である」（八一頁）とのべて、唯物史観における階級斗争論の意義を指摘してはいるが、階級斗争について特にのべているのは第三章ではこの三行だけであるのに対し、レーニンは「唯物史観」の後に（すなわち「マルクスの学説」のしめくくりとして）「階級斗争」の項目をとくにもうけて、それに関するマルクスの思想が『共産党宣言』に如何に明確に定式化されているかを説明し、「諸事件の原動力としての階級斗争」についてのマルクスの基礎理論や歴史研究による「すべての階級斗争は政治斗争である」いてのべている（PP. 31—34）。またルフェーヴルの第四章における剰余価値論の説明はきわめて簡単であつて（九七—九八

頁）、『資本論』第一巻第七篇「資本の蓄積過程」については全くふれられていないのに対し、レーニンでは「マルクス経済理論の土台石」（P. 112）としての剰余価値論については特に項目を設けてヨリ詳細に説明する（P. 38—41）とともに、『資本論』が労仂時間をめぐる労資のはげしい階級斗争ならびに国家権力の干渉に関する「巨大な画像を我々の前に現前せしめる」（P. 41）ことをとくに指摘し、「さらに、きわめて重要でかつ新らしいのは、マルクスの資本蓄積の分析である」（P. 41）として、「資本の蓄積過程」における『資本論』の説明を要約し、「簒奪者が簒奪される」という文章でおわる有名な箇所を引用している。さらにルフェーヴルが第五章マルクス主義政治学において、レーニンが『国家と革命』の中で「この試金石にあててマルクス主義を本当に理解し、認識しているかどうかをためさなければならない」（社会書房『レーニン二巻選集』第二巻8四四頁）としたところのプロレタリアートの独裁についてのべている箇所を見るならば、「プロレタリアートの（ブルジョジーにたいする）独裁—ブルジョア民主主義の終焉——民主主義の開花——ブルジョア的あるいは小ブルジョア的民主主義者によつてなされたけれども決して果されたことのなかつ

た諸々の約束の履行、これらはいずれも等価な項である。もし独裁があるとすれば、それは社会的総体の規制者として、資本主義の不安定な均衡を特徴づけている、統制も法則もない私的創意から生ずる盲目的平均にとって代つた経済学的社会学的な科学の独裁である」（一〇九頁）とかかれている。レーニンによればそれは「不可避的に、未曽有の激烈な階級斗争の時期である」（前掲選集四五頁）のに、ルフェーヴルによれば「もし独裁があるとすれば、それは……科学の独裁である」。われわれはここにもまた、「マルクスが正当にもこの側面（プロレタリア階級斗争の戦術の問題）を欠いた唯物論を半端で、一面的で、死んだものと考えたということを強調する」（P.59）レーニンとの差異を看取せざるを得ないであろう。

註(1)　この点については『弁証法的唯物論』（本田訳）七九—八五頁、『マルクスの思想を認識するために』一一一—一一四頁を参照。

(2)　研究所版『資本論』のはじめにおかれているレーニンの『カール・マルクス』の最後には、『国家と革命』のこの部分が、「プロレタリアートの独裁」という項目で追加収録されている。

六

マルクスが『ドイツ・イデオロギー』の中で、唯物史観の結論として、「共産主義的意識の大量的な産出ということのためにも、また事態そのものを遂行してゆくことのためにも、人間の大量的な変化が必要であり、この変化はただ実践的運動においてのみ、革命においてのみ、おこりうるということ。だから革命は、支配階級を打倒するには他のどんな方法によってもなしえないという理由から、必要であるばかりでなく、さらに、打倒する階級は革命においてのみいつさいのふるい汚物をはらいのけ、あたらしい社会建設の能力を賦与されるにいたりうるという理由からいつても必要なのである」（大月書店版選集第一巻八四頁）とのべているように、社会革命と人間革命とはマルクス主義においてははなれがたくむすびついている。したがつてマルクス主義の理想主義的・ヒューマニズム的側面を力説することとその階級的党派的側面を強調することとは決して矛盾するものではなく、むしろこの両面の統一的把握によつてこそマルクス主義の正しい理解がえられるというべきであろう。ルフェーヴルの『マルクス主義』によつて著者自身の期待どおりよく「マルクス主義の豊かさとその立論の力強さがことごとく示される」（一三頁）ためには、読者はこのような観点から

本書に接し、レーニンとの対比においてあきらかにされたような諸点については、特に心して本書から読みとる（あるいはむしろ読み込む）べきではないであろうか。これが本稿の一応の結論であつて、ルフエーヴルのマルクス主義論のヨリ本格的な研究は、マルクスにおける人間の自己疎外の問題――それとの関聯において全体的人間の問題や分業の問題など――を重視する点でルフエーヴルと共通な関心をしめしているレーヴィット（『ウエーバーとマルクス』）や、ヘーゲルからマルクスへの展開において一八四四年の『経済学・哲学草稿』がしめる意義の重視やマルクス主義と実存主義との対比という問題意識においてルフエーヴルと相似た観点に立つているルカーチ（『若きヘーゲル』、『実存主義かマルクス主義か』）などとの親近性と差異についての比較検討という興味あるテーマをふくめて、すべて将来の研究を期することにしよう。（一九五三年七月十五日）